

無事の市民悼む不戦の「刀」

増山雄三

コロナ禍で混迷する中、戦後七十五年の夏を見つめ直そうと、姫路市の手柄山中央公園にある「太平洋戦全国戦災都市空襲死没者慰霊塔」へ向かうと、暦の上ではもう立秋とはいえ、記録的な猛暑で、とにかく暑い。

山陽電鉄の手柄駅で降りると、緑あふれる小山が見え、シラサギが群れをなす標高四十九米の手柄山へ、息を切らせながら登り山頂に到着すると、そこからは、姫路城や姫路の街が、パノラマのように広がって見える。

武器の象徴である、「刀」を大地に突き立てたデザインで、「もう戦争はしない」という、不戦の誓いが表現されている、慰霊塔の先端を目印にして歩いていくと、すぐにたどり着いたものの、私以外は誰もいない。

それは、「三密回避」の時節なので、慰霊

塔の前には線香も花束もなく、複雑な気持ちを抱えながら、塔の前で頭を垂れた。

この慰霊塔は現在、一般財団法人「太平洋戦全国空爆犠牲者慰霊協会」が管理するが、戦後すぐの一九四七年、当時の石見元秀姫路市長が、全国に呼びかけ結成された「全国戦災都市連盟」を中心にして、昭和三十一年（一九五六年）十月二十九日に建立された。

慰霊塔は高さ二十七、七米あって、塔身は「前室」「前垂」そして「側柱」で構成されて、前垂の日本地図には、一都九十九市十三町の百十三戦災都市の位置が示され、「太平洋戦全国戦災都市空爆死没者の霊」此のところに眠る」とあり、また側柱には、各戦災都市が空爆を受けた年月日や死没者数、それに罹災を受けた人口などが刻まれている。

水戸市の記録が刻まれた側柱の前で、私の足が止まったが、昭和二十年八月一日未明の空襲で、水戸市内に住んでいた、当時八才の私は母に手を引かれ、雨霰のように落ちてく

る焼夷弾の中を逃げ惑い、辛うじて命拾いを
する事ができ、幸いにも死没者ではなく、罹
災人口の中に数えられたが、百坪ほどの敷地
にあった屋敷と蔵は、跡形なく焼け落ち、残
っていたのは、焼けた水道の鉛管から、ポタ
ポタと落ちている水だけだった。

そして、毎年建立日に、追悼平和祈念式が
営まれ、空爆で犠牲になった、五十万九千人
余の民間人死没者を供養してきたが、塔の背
面に刻まれた長文の中には、「身に何等の防
備なくして無慙なる空襲の中に敢なく非業の
死を遂げた幾多の無辜の市民については全く
これを顧みるところがなかった」とある。

近くにある姫路市平和資料館には、戦時中
の人々の生活等を伝える、市民から寄贈され
た貴重な資料が展示されているが、一九四五
年六月二十二日と、七月三日深夜から四日未
明にかけての「姫路空襲」についても、自分
の経験を思いながら学ぶことができた。

同館で開催されていた、「非格平和展」で

は、被爆地の広島や長崎に関するパネル展示と併せて、子供達が寄せた平和や格廃絶を願う絵や書が飾られていたが、戦災犠牲者の追悼行事の中止が相次ぐ中、考える力だけは培っておきたいと思った。

令和二年九月